



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	清末新政期の鴉片政策と中央・省関係：政策評価の問題を中心として〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	坂東, 泰
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16168号
Issue Date	2024-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93299
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Yutaka_Bando_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 坂東 泰

学位論文題名

清末新政期の鴉片政策と中央・省関係——政策評価の問題を中心として

（１）本論文の観点と方法

鴉片（アヘン）が近代中国において重要な国際問題であったと同時に社会問題であったことは、「鴉片戦争（外国産鴉片の輸入をめぐる国際紛争）」「禁煙運動（鴉片禁圧政策）」という二つの語句を挙げるだけで、容易に理解されよう。国内外の中国史研究においても、鴉片をめぐる諸問題は中国近代史の重要な研究テーマとして、これまで数多くの研究が積み上げられてきた。そうした研究史のなかにあって、本論文は二〇世紀初頭の清末新政期（清朝が政治体制の近代化を目指した改革期）を検討対象とし、きわめてユニークな視点と分析手法とによって、新たな問題提起と解明を行なった。

本論文は、禁煙運動の背景にあった流通構造のなかに、旧来の研究が見過ごしてきた「戒煙（鴉片吸飲習慣を断つための働きかけ）」という側面があることを発見し、研究におけるその重要性を問題提起した。旧来の研究がおもに「禁煙」の成否に注目してきたことを批判し、「禁煙」成果が世に喧伝されるなかにあっても、実態としては「戒煙」のための治療薬という名目で鴉片が流通し続けており、地方官憲によってそれが全面禁止ではなく流通管理されていたことを明らかにしたのである。また本論文は、禁煙運動をこうした鴉片の流通構造から見ることで、それが清末にあっては（光緒）新政と呼ばれる政治改革、特に中央財政改革および中央・地方関係の構造的再編と密接に結び付いていたことに注目した。近年においては、新政の一環としての「清理財政（前近代的な財政構造の近代化）」政策が、多くの研究者の関心を集めているが、これと旧来のテーマである鴉片問題が結び付くことはなかった。本論文はその接続を試み、鴉片問題が当時の清理財政政策で目的とされていた財政集権化の一部であったこと、また新政下の禁煙運動の実態、およびもう一つの問題であった中央・地方関係の構造的再編を読み解く手掛かりとなることを明らかにした。これが本論文の観点面での特長である。

本論文は、以上の問題意識の下、山西省を例に、巡撫（省の行政長官）と中央官庁との間の公文（行政文書）のやり取りを解析、また当時実際に鴉片を栽培していた農村で起きた騒擾事件を分析して、省内の地域社会と地方官憲との関係を解明する試みを行なった。中央の政策決定とそれを受けた地方の施策過程、およびそれに対する基層社会の反応という関心で注目されてきた問題を、中央・地方間の鴉片税收の獲得をめぐる駆け引き、および禁煙運動の下での基層社会の現実を反映するものとして、新たな視点から読み解いた。これが本論文の方法面での特長である。

（２）本論文の内容

本論文は、緒論、三つの章、結論の五つの内容から構成される。

緒論では、中国近代史上の鴉片問題に関する国内外の研究を研究史的に整理した上で、旧来の研究がおもに「禁煙」の成否に注目してきたことを批判し、「禁煙」成果が世に喧伝されるなかにあっても、実態としては「戒煙」のために鴉片が全面禁止ではなく流通管理されていたことに目を向けるべきであるとする独自の観点を提示、それを踏まえて本論文の方法を説明し、あわせて本論文の目的・構成について解説した。

第１章では、清末に新設された「土薬統税（鴉片流通税）」に注目して、その制度的構造を詳細に検討することで、この土薬統税の制度によって鴉片税收の集権化がどの様に実現されていたのか、という点について論じた。

第２章・第３章では、以上の問題意識の下、山西省を例に、巡撫と中央官庁との間の公文のや

り取りを読み解くことで、中央ではなく省にとって、禁煙運動を実施することがどのような意味をもっていたのか、という点について論じた。

第2章では、山西省における禁煙運動の実施が土薬統税の運営体制に与えた影響を論じた。すなわち、第1章と第2章との議論を総合すると、中央政府は確かに土薬統税の徴収業務を主導し、各省の鴉片税収を吸収するに至ったのだが、土薬統税はあくまでも鴉片の流通を捕捉するための制度であって、徴税機構と鴉片の流通経路とが重なり合っている状態を保ち得るか否かは、各省の動向によっていたと結論付けられる。これにより、土薬統税が、単純な制度史的理解で終わる研究課題ではなく、省政府が禁煙運動を進め、鴉片の流通のあり方を再編していくと、土薬統税は機能不全に陥り、最終的に廃止されるに至ったというように、中央・地方間の鴉片税収の獲得をめぐる駆け引きのなかで読み解かれるべき問題であることを明らかにした。

第3章では、山西省の文水県と交城県で発生した禁煙運動に対する農民の抵抗に注目し、禁煙運動の実施が基層社会に与えた影響について論じた。この事件は従来、禁煙運動の成否を重視する観点から、官憲が鴉片生産に生計を依存する農民の事情を顧みなかった結果として生じたものと理解されてきた。しかし禁煙運動の実施によって農民の抵抗が起きるかどうかは、農民の抱える事情だけでなく、県の長官である知県と在地有力者である紳士とが協力関係にあったか否かによっても左右されていたことなどが明らかとなる。本論文の以上での議論を踏まえて再考すると、総じて山西省における禁煙運動をめぐる利害関係の複雑さと、それを調整することの難しさが読み取れる、と論じた。

結論では、以上の議論を要約、論点を再整理して提示し、清末の鴉片問題が、輸入と禁圧、およびその成否という単純な構造ではなく、流通と管理、政治体制改革、中央・地方関係、地域社会の矛盾など、多岐にわたる側面に現れた諸問題を反映する、きわめて複雑な構造を持つものであったことを論じた。あわせて本論文が今回、清末新政期について得た知見が、それに続く中華民国期における軍閥割拠状況下での禁煙運動の連続と不連続を理解する上でいかなる意味を持つのか、歴史的観点から展望を試みた。